

キャンパスの樹々 1

アベマキ

森 一郎

(女子中学・高等学校教頭)

今出川キャンパス東端、女子部校内の北東隅のテニスコートとグラウンドの間に他の木々とは孤立してアベマキの老木がある。根元から二つに別れ高さ十七mそれぞれ幹の太さは胸の高さで直径九〇cmと七〇cm、根元では直径一・二〇mはある。樹齢何年くらいだろうか。牧野植物図鑑によると「大きなものでは高さ十七m直径六〇cmにもなり」とあるが、このアベマキは引けを取らないどころかそれ以上である。かなり珍しい老大木であるとみて間違いない。常はグラウンドを挟んで離れてみているが、近づくと樹皮は厚く、荒々しく縦に深い裂け目が入っている。アベマキの「アベ」が岡山県の方言でアバタから来ているというのがうなずける。

一年を通してこの木を見ていると、四季折々その姿を変えている。二本は南北に生えているが、春に淡い緑色で芽吹き



徐々に濃さをまし、夏には青々と茂り堂々とその風格を誇示している。秋の紅葉、落葉の季節に入ると、まず北側の木の部分から紅葉し、そして南側の木へと移る。続いて北側の木から落葉しだして、南側の木が落葉し、冬を越す準備が完了する。ちょっととした位置関係の違いに自然の営みの微妙な変化が見られて面白い。ただ、周りがグラウンドの土で、寄り添うエノキ以外何もない。「孤高」というふうでちょっと寂しそうである。雌雄同株であるが仲間が近くにいない為か、今まで実のなつたのを見たことがない。

根元がアスファルトで固められた樹木に比べれば幸せだろうが、仲間と樹林を形成し、根元にフカフカの落ち葉のじゅうたんがあるのがふさわしい。

何々の所縁の木というのであるかどうかは不明だが、女学校の開校以前、元公家屋敷であった二条家の頃からこの位置にあったに違いない。お公家さんの生活から現代の女学生へ、時代の大きな変化を根を据えてじつと見つめてきたことであろう。